

障害者の「心身」を開く

「治療的乗馬」の取り組み

東京農業大学農学部 教授 滝坂信一

私が取り組んできたのは、「障害」のある人々のそだちとくらしを心理学と教育学の領域から考えるということである。これらを通じて、社会的存在としての人とはどういうことか、社会と個人との関係とはどういうことかを考えてきた。

「ある社会がその構成員のいくらかの人々を閉め出すような場合、それは弱くもろい社会なのである。障害者は、その社会の他の異なったニーズを持つ特別な集団と考えられるべきではなく、その通常の人間的なニーズを満たすのに特別な困難を持つ普通の市民と考えられるべきなのである。」これは国際障害者年行動計画（1980）の一節だ。私たちは、どのようにどの人をも締め出さない社会をこの日本に実現することができるだろうか。

「万人のための社会」をめざす

1993年、ウィーンで開かれた世界人権会議は、「万人のための社会（Society for All）を2010年までにつくりあげることが国連の障害者問題についての課題である」とする＜ウィーン宣言、行動計画＞を採択した。国連はこれを受け、1994年「あらゆる市民のニーズが計画立案と政策の基礎となる」『万人のための社会』（1995～1996：導入期、1997～2002：中期、2002～2010：さらなる達成）」の実現に取り組むことを総会決議した。

明治維新以降につくられた現在の日本の社会システ

たきさか しんいち

1950年福島県生まれ。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。東京農大農学部バイオセラピー学科（動物介在療法学研究室）教授。専門分野：臨床心理学、教育方法、治療的乗馬、社会認識。

主な研究テーマ：障害のある子どもの教育と馬を用いた活動の評価法。

主な著書：発達障害白書 2007特集・岐路に立つ日本制度改革の行方（共著）日本文化科学社、特別支援教育の学習指導案づくり（共著）明治図書。



ムは、簡単に言うと「国が決めたことを都道府県を通じて市町村に具体化させる。国民はこれに従っていれば幸せになれる」というシステムだ。これに対し「万人のための社会」のシステムは「一人ひとりのもつニーズ」から始める。「一人ひとりのもつニーズ」を実現する仕組みを小さな単位から構成し、最終的に国の単位を創るという考え方だ。これは、天動説から地動説への転換、社会システムの「コペルニクスの転回」と呼ぶことができる。こういった社会では、障害があるから、人種や言葉が違うから、女性だから、子どもだ

（2ページから）

アフリカへ、そして未来へ

4月からは当研究室にはじめてアフリカからの留学生を迎え、アフリカのイネウイルス研究を開始する予定である。本年1月には国際協力機構の委嘱で、タンザニアやウガンダのイネ栽培における人材育成や病害研究を目的とした調査も行った。「アフリカのための新しい稲（New Rice for Africa）」を意味するNERICA稲栽培には、日本人の専門家が精力的に取り組んでいる。今のところNERICAに発生するウイルスは1種類だけであるが、どのように突破口を開けばいいか、作戦を練る日々が続きそうだ。

ウイルスに関する知識や技術が役立つのは、国や地

域を問わない。また、視野を広くすることによって研究をより深めることができると考え、ウイルス病だけに限らず、菌類病や生物資材に関する研究にも取り組むほか、フィールド調査も重視している。農業を営む卒業生から持ち込まれる病害標本は、学生にとっては勉強のチャンス、嬉しい贈り物だ。こうした日々の研究室運営の中、日本で熱帯作物のウイルスを専門に扱う大学の研究室は、ここだけという自負もある。ウイルスは電子顕微鏡でなければ見えないほど小さく、ともすれば気付かれない存在かもしれないが、農業生産における阻害要因としては想像以上に大きい。ダイナミックに変異し、拡散を続ける植物ウイルスをいかに制御するか、チャレンジする課題はまだたくさんある。